

プリズム

プリズムを通過した透明な陽光は分離される

(いかなることがあろうと私は書く)

死という事実が目の前にある、が
しかし、目を閉じたお前の顔は、今
ほんのわずかだけ眠るときと何ら変わりがない

その一方で
増幅された青い波長が
暴力的な時間の横顔を照らす

物質への回帰が進行しているのは
何も、この目の前においてのみではない
生きている我々の中においても変りはない

(舞曲の延長であるものなど所詮、興味はない)

たまらず外へ出ると
斜めに傾いた信号の点滅が
我々自身の眩暈を警告している

次々と感染は拡大し
あちこちで喉が掻き切られる
ひとたび狂い出したら止められない

20億光年の空間など要らない
我々を飛び越えて感染を広げるための
それだけの可能性しか有しない空間など

(現象という映像だけが屈折、分離する)

分離したそれぞれの波長光
それらが再び交錯、散乱し
我々を幻惑する色彩の乱舞となって死を塗り潰してゆく

おぞましい腐乱など存在してはならない
それは廃棄されねばならない
完全に抹消しなければならぬ、と・・・

終いには生命など不要なものとなるだろう
我々は生命から逃げ出すことになるだろう
生命ではなく、機能を選ぶことになるだろう

(果てしなく続く機能的活動のみが残る)

僕はほとんど嫌気がさしていた
と、その時
ひとつの歌が流れてきた

「旗を掲げ 旅立つがいい
プリズムを棄てよ
お前自身の掌に受けた陽光
その温み
お前を愛する者たちの血の温み
保存ではなく
再生を行うこと
新たな戒めを記すがいい 」

それはあまりに無慈悲で苦しすぎた
分かりきっているほど分かっている
僕はそれに耐え切れるのだろうか

そこら中に組み込まれた無数のプリズムが
むしゃむしゃと陽光を食い漁っている
残されたものは単なる排泄物のような散乱光

滅することの機能的意味
フガートな自由律という
もっともらしい顔をした計算結果

(滅び、朽ち、消え去るがいい)

既に僕の目は閉じられていた
無意味であることなど、もうどうでもいい
狂っているのは我々自身であるからには

僕は軽蔑を込めてランボーの名を口にした
そして同様にピカソの名をも
予言者として去っていった彼らの名を

目の前に見える二本の銀色のレール
その続く先ではなく
そのレールそのものの呼び声の向こう側

(その2本のレールとレールの間にプリズムがある)

僕は敗れる

(2009.2.14)